

東京学芸大

中橋美智子

○豊島区立池袋五小 武井俊子

**目的** 我国において紙が衣料として着用されはじめたのは、平安時代までさかのぼることができる。はじめ僧侶の質素な衣服として着用され、安土・桃山・江戸時代では武士および一般庶民にも広く普及した。しかし明治以降西欧諸国からの新しい衣料の輸入とともに紙の衣料は急激にその姿を消していった。江戸時代においては木綿の少なかった地方ではその代用品として紙布・紙子などが日常の衣服として用いられていた。最近でも冬期保温のため新聞紙をまったり、宗教的な儀式でもあるが二月堂のお水取では紙子が着用されている。そこで紙布・紙子・新聞紙など紙の衣料の実用性について特に保温の立場から着用実験を試みたのでその結果について報告する。

**方法** 試料：白紙子（二月堂お水取着用）、白石紙布、白石紙子、新聞紙、比較として浴衣地、ウール地を用い長着およびそでなしチョッキを作製。着用実験：夏期（30℃）紙布と浴衣の比較、冬期（15℃）風の有無による白紙子とウールの比較および紙子・新聞紙によるそでなしチョッキ着用の有無による比較。被験者：成人女子5名。測定項目：皮膚温、衣服気候、舌下温。

**結果** 紙布：着用実験、性能面ともに浴衣地と大差ない。白紙子：無風時ではウール地と差異はない。有風時での保温効果に優れている。白石紙子・新聞紙：着用による保温効果が著しい。紙布は軽く、肌ざわりよく、洗たく可能で浴衣と同程度の性能があり夏の衣料として好まれ、紙子・新聞紙など強度・縫製面には劣るが軽く保温効果もあり冬の衣料としての実用性が重視されていたものといえる。